

# 共同研究の経過と概要

高桑いづみ・日高薫

## 一 目的

本書は、国立歴史民俗博物館が、平成一八年度から平成二〇年度にかけて実施した基盤研究「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」の報告書である。

本館が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクションは、紀州藩の第十代藩主徳川治宝（一七七〇～一八五二）がほぼ一代で築きあげた最大級の古楽器コレクションである。総点数一五九件（二三一点）を数える本資料は、雅楽用の楽器を中心に、笙・笛・琵琶・箏・太鼓などの楽器二十数種、楽譜、付属品など、さまざまな時代の楽器で構成されており、楽器史・音楽史研究上、極めて重要な資料として位置づけられる。

さらに本資料を特徴づけるのは、種々の付属文書・付属品に恵まれている点である。各々の楽器に伴う、入手に関わる情報・伝来・鑑定・銘の下書き・修理や製作に関わる情報などを記した付属文書からは、音楽・楽器の歴史のみならず、幕末期の大名家を中心とした文化のありさまをうかがうことができる。また、工芸の粋を集めて装飾された楽器本体や、箱・袋などの付属品は、美術工芸品としての価値も高い。複数の分野にまたがる研究資源として、多くの可能性を秘めた資料といえるだ

ろう。

その反面、破損しやすく保存状態の悪いものを多く含むことや、各種技法・素材が混在する点、進展しているとは言いがたい楽器史研究の現状など、調査研究にとって、必ずしも好条件とはいえない要素も少なくない。資料の調査研究をすすめると同時に、多くの付属品・付属文書をいかに整理・管理するかという実質的課題に取り組む必要がある。

本研究は、このような特色を有する紀州徳川家伝来楽器コレクションを対象とし、音楽史、楽器史のみならず、美術史学、文献史学、自然科学など、多角的な視点からの資料研究をおこなうものである。楽器コレクション研究の問題点を明確にし、将来の発展的研究の基礎を築くことを当面の目標とした。対象となる資料に関しては、平成一五年度の資料図録の刊行、平成一六年度のデータ・ベースの公開によって、すでに基盤となる資料情報が整備されているが、続く平成一七年度夏に特別企画を開催したことにより、関係分野の研究者の関心が集まり、調査依頼や、より詳細な情報提供を求める問い合わせ等、外部からの要請も高まりつつある。このような意味で、本共同研究の発足は、時宜を得ていたといえるだろう。

本研究に着手するにあたっては、主たる目的として以下の二点を設定

した。

① 複合的視点からの楽器調査

本コレクションの楽器に付属する文書資料には様々な情報が含まれている。付属文書を読み込むことにより、楽器コレクションが形成された経緯がより明確となり、また当時の文化状況を読みとることも可能である。しかし、記された楽器の来歴や鑑定に関わる内容が事実であるかどうかについては、文献資料からの検討や、外見上の詳細な調査観察に加え、楽器内部の撮影や、使用されている素材の特定などの科学的調査が必要となる。そこで、本研究では、コレクションに含まれる楽器の詳細な調査をすすめるとともに、今後の楽器調査に求められる科学的調査方法の検討も合わせておこなう。

② 楽譜類の研究

本コレクションは多くの楽譜類を含んでいるが、これらに関する基礎的な研究はおこなわれていない。コレクション中の三〇件の楽譜の奥書等を精査し、他の伝本と比較研究して、伝承の系譜を明らかにする。

二 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者、所属は当時のものを記す）

遠藤 徹 東京学芸大学教育学部  
小代 涉 学識経験者  
薦田 治子 武蔵野音楽大学音楽学部  
清水 淑子 学識経験者  
高橋 美都 同志社大学文化情報学部  
中里 壽克 鶴見大学文学部  
野川美穂子 東京芸術大学非常勤講師

能城 修一 森林総合研究所

水野 僚子 大分県立芸術文化短期大学

◎ 高桑いづみ 東京文化財研究所（本館客員教授）

永嶋 正春 本館・研究部・准教授

○ 日高 薫 本館・研究部・准教授

宮田 公佳 本館・研究部・助教

久留島 浩 本館・研究部・教授

内田 順子 本館・研究部・准教授

研究協力者

角 美弥子 九州大学大学院芸術工学府・ホールマネジメントエンジニア育成ユニット学術研究員

田中 敏長 笛制作者

田中 彩子 笛制作者

協谷 真弓 武蔵野音楽大学学芸員

中村 鶴城 薩摩琵琶奏者

三 研究経過

（一）平成一八年度

平成一八年度は、具体的な調査研究をすすめるにあたっての、研究方法やいくつかの中心課題を設定し、予備研究を実施した。

① 雅楽器との比較研究のための能楽器に関する情報収集および調査（二〇〇六年四月七日 滋賀県個人・四月二四日 国立能楽堂）

② 「上野学園大学日本音楽史研究所蔵 雅楽の変遷―古の音色を求めて―」の見学（二〇〇六年一月一八・一九日 思文閣美術館）

③ 楽器・楽譜調査の方法に関する分科会（二〇〇六年二月二〇日 国立歴史民俗博物館）

立歴史民俗博物館

④全体会および資料調査（二〇〇七年三月一日 国立歴史民俗博物館）  
今年度の経過を報告し、来年度の研究計画を決定した。以下の資料調査を行った。

H-46-11 笙（銘「山端」）・H-46-19 袖笙（銘「燕子」）・H-46-22 箏  
（銘「思月」）・H-46-39 龍笛（銘「青柳」）・H-46-43 能管（銘「男女川」）・  
H-46-46 龍笛・高麗笛（銘「金龍」）・H-46-88 神楽笛（銘「神倉山」）・  
H-46-79 一節切（銘「山風」）・H-46-86 一節切（小簫）・H-46-100 琵琶  
（銘「文殊丸」）・H-46-114 琵琶・H-46-115 箏（銘「君が千歳」）・  
H-46-122 倭琴（銘「大桐」）

⑤楽譜資料の伝本研究に着手した（遠藤らが担当）。

⑥国立劇場に所蔵される紀州徳川家旧蔵雅楽器の付属文書の翻刻を完了した（小代・水野らが担当）。当該資料は、後世になって本館所蔵資料と分かれたものであり、コレクションの全体像を把握する上で極めて重要である。翻刻した付属文書には、本館所蔵の楽器に関する記述もみられることが判明した。

⑦琵琶・箏などの槽内銘の観察方法に関して議論し、実験に必要な機器を選定し、今後の実験計画の概略を決定した（高桑・日高・永嶋・薦田ら）。

⑧管楽器の音色調査についての見通しを決定した（高桑・遠藤ほか）。

（二）平成一九年度

吹きものを中心として調査をおこない、あわせて次年度に実施予定の琵琶の調査の準備を調えた。

①吹きもの（龍笛・高麗笛・神楽笛・能管・箏）の調査（国立歴史民俗博物館）

二〇〇七年七月二日・三日 龍笛および能管（H-35-37～H-35-60）

二〇〇七年八月二日・二日 龍笛および能管（H-46-37～H-46-60）

二〇〇七年九月二〇日・二日 高麗笛・神楽笛・箏（H-46-61～72、H-46-22～28）

二〇〇七年一〇月一日 箏（H-46-22～28）上記の研究会では、笛の制作者、田中敏長氏など専門家をゲストとして迎え、吹きもの調査をほぼ完了した。調査方法は、詳細な法量測定・肉眼観察による技法の検討などの基本調査、および透過X線撮影・デジタル顕微鏡・蛍光X線撮影による分析調査などである。

②箏の調査（国立歴史民俗博物館）

二〇〇七年八月七日・八日（H-46-115～H-46-119）

③能楽器関係の情報収集と調査

雅楽器との比較研究のための能楽器に関する情報収集を行い、あわせて調査も行った。（二〇〇七年八月二八日・二九日 宇良神社・一月一日・二日 尾張徳川家）

④内視カメラによる琵琶の調査方法について検討し、実験用琵琶の作成を琵琶制作者、田村皓司氏に依頼した。（二〇〇七年九月二八日）

⑤楽譜資料および付属文書資料の整理および研究をすすめた。

⑥年間の成果の整理（二〇〇八年三月二六日 国立歴史民俗博物館）

調査によって得られた知見を整理し、研究会のメンバーで共有するための報告会を行った。

（三）平成二〇年度

コレクション中点数の多い琵琶を中心として調査をおこない、あわせて箏・琴類の調査もおこなった。また、これらの調査を通じて、CCD内視カメラによる内部調査の方法について検討した。

①琵琶の調査

二〇〇八年八月七日 内視カメラによる調査の実験・打ち合わせ(国立歴史民俗博物館)

二〇〇八年八月一日・一九日・二〇日琵琶の調査

美女(H-46-97)・筑夫鳥(H-46-98)・白鳳(H-46-92)・朝暘(H-46-95)・箕面(H-46-94)・雲鶴(H-46-103)・嘉吉丸(H-46-101)・白菊(H-46-113)・小嵐(H-46-96)

二〇〇九年二月二四日・二六日・三月三日琵琶の調査

千歳丸(H-46-102)・雲上(H-46-105)・武蔵野(H-46-107)・白神(H-46-108)・文殊丸(H-46-100)・箕面(H-46-94)・小白菊(H-46-93)・花園(H-46-99)・小車(H-46-110)・満月(H-46-111)

調査方法は、詳細な法量測定、肉眼観察による技法の検討などの基本調査、およびCCDカメラによる槽内観察(一部の資料のみ)、透過X線撮影である。

#### ② 箏の調査

コレクション中の箏・琴類に関して、詳細な法量測定、肉眼観察による技法の検討などの基本調査、一部の資料に関してCCDカメラによる内部観察)をおこなった。

#### ③ 関連資料の調査と情報収集

紀州徳川家伝来楽器コレクションとの比較研究のため、関連資料の調査等を行った。

箏の調査 二〇〇八年六月二四日 常寂光寺・平等寺

箏六面の調査 二〇〇八年六月三〇日 彦根城博物館

琵琶のX線写真の閲覧と撮影方法に関する意見交換 二〇〇九年二月二日 宮内庁正倉院事務所

#### ④ 楽譜資料および付属文書資料の整理と研究

二〇〇八年七月七日 楽譜調査に関する打ち合わせ (東京学芸大学)

二〇〇八年九月二四日・二五日・二六日 楽譜調査(H-46-139) (国立歴史民俗博物館)

立歴史民俗博物館)

二〇〇九年二月一九日・二〇日 楽譜調査(H-46-139) (国立歴史民俗博物館)

二〇〇九年三月二日 楽譜調査(H-46-139) (国立歴史民俗博物館)

#### ⑤ 辻家資料の調査研究を行った。

二〇〇八年七月二八日 辻家資料(寄託資料)文書調査(国立歴史民俗博物館)

## 四 研究の概要

(1) 笛類(龍笛二五・能管二・高麗笛八・神楽笛四・箏一五・計五  
四点)に関して、①詳細な法量測定、②肉眼観察による構造・技法などに関する基本調査、③透過X線撮影による内部の形状・継ぎ合わせなどの構造の確認、④デジタル顕微鏡・蛍光X線撮影による分析調査 などを実施した。

(2) 琵琶 二三面に関して、①詳細な法量測定②肉眼観察による構造・技法などに関する基本調査、③透過X線撮影による内部の形状・構造の確認(一部の資料のみ完了)、④CCD内視カメラ槽内観察による内部構造と墨書銘の確認 を実施した。槽内観察については、実験用琵琶を製作し、調査機器の性能と調査方法を検討したうえで、半月の大きい琵琶に関して、実際にカメラを挿入して槽内観察を行ったが、はかばかしい結果を得られなかったため、翌年度に赤外線カメラによる観察を試みた。今回採用した方法は、半月の小さい琵琶の観察には無理があり、今後の課題が残った。

(3) 箏・琴類に関して、①詳細な法量測定、②肉眼観察による構造・技法などに関する基本調査 を実施した。

(4) 楽譜・文書の調査 ①楽譜類三〇点に関して、マイクロフィルムによる検討と実物資料の調査を行い、奥書を有する楽譜については、紀州徳川家と楽家との関係について検討した。②付属文書を精査し、資料図録における解釈の一部を修正するとともに、紀州徳川家と楽家との関わりなどについて新知見を得た。

本研究は、紀州徳川家伝来楽器コレクションの本格的な調査をおこなった最初の研究である。

多数の資料にわたることや技術的な問題から、全ての楽器の調査を完了することは不可能なため、楽器種を笛・琵琶・箏類に限定することとした。

科学的調査については、X線透過撮影と琵琶・箏類の内部観察に焦点をしぼり、素材の木質調査による樹種同定については見送っている。X線CTスキャン等を利用した樹種同定については、極めて有効で意義のある研究と思われるが、調査環境の整備に関する周到な計画が必要である。

琵琶・箏の内部観察についても実験的な段階にとどまっている。琵琶の半月からのCCDカメラ挿入については、資料に機器を接触させずにおこなうことは困難であり、資料を傷つける危険性をはらんでいるため、今回は一部の資料について実験的観察を行った。同様の理由で、笛の実演奏と録音・ピッチ測定についても、資料(楽器)の清掃・調整が不可欠であるため、今後の課題とすることとした。科学的調査方法により得られる情報は大きく、また楽器の音の再現は当該分野の研究において極めて重要と考えられるが、文化財としての資料にどこまで調査の手を加えるかという問題については、慎重に議論を重ねる必要がある。

以上のように多くの課題を残す結果とはなったが、楽器調査の方法についての共通認識を深め、今回対象とした資料に関して多くの新知見を

得ることができたことは、本研究の大きな成果と考える。共同研究によって確認し得た調査研究の方向性にしたがって、今後も研究を継続していきたい。

なお、本報告書においては、笛のX線透過画像のみを掲載するが、他の楽器についても引き続き作業を進め、画像を公開していく予定である。また、本研究の成果は、「データ・ベースれきはく〔館蔵紀州徳川家伝来楽器〕」の修正・更新、今後開催予定の企画展示・特集展示等で順次公表する予定である。

高桑いづみ(東京文化財研究所、国立歴史民俗博物館客員教員)

日高 薫(国立歴史民俗博物館研究部)